

文樂號

幕間別冊



1/6

わが演劇史上

空前なる

文樂座

行幸と

山城少掾の

掾位受領とを

記念して

まくあひ

第十五號

文樂

文樂座行幸

富眞

人形の首
人形の型

天覽の人形淨るり

高安六郎

奇蹟を創る人々

武智鐵二

藝の怖ろしさ

竹本綱太夫

三味線ひきと爪

竹澤彌七

天覽の光榮に浴して

吉田文五郎

隨

重い負擔

太宰施門

筆

四世豊竹仙糸
人形にうれし涙の
ある日なり

齋藤拳三
吉永孝雄

掾についで

木谷蓬吟

伽羅先代萩と忠義

三宅周太郎

文

先代大隅の寫實
竹本大隅太夫

樂

多爲藏さん
桐竹門造

藝

忠信と熊谷
吉田玉助

談

勉強の機會
豊竹つばめ太夫

幕間一夕噺

私の弱點
竹本濱太夫

榮三おじいさん

義太夫地の所作物
野澤松之輔

「神崎揚屋」の梅ヶ枝

先代紋十郎の藝
桐竹紋十郎

文樂の危機

廿五年の相三味線
鶴澤清六

焼け残つた首

「千本櫻」の道行の話
鶴澤清八

「酒屋談義」

山城少掾聞書
豊竹山城少掾

文樂入門の書

茶谷半次郎

表紙・カット

高木四郎

榮三

おじいさん

花柳章太郎



吉田榮三に訊書。

榮三の役々。

柳かけ。

蔭の下駄。

をじいさんのことはこれだけ書いた。

をじいさんのことを思ひ出すと、いまでも胸

にジーンと迫つて来るものがある。

私の藝風から言つても、性質から考へても、

榮三と親交があることが不思議だと言ふ人もあ

る様だ。

然しそれは理窟で、物事は理詰めばかり考

へられないものがあると思ふ。物には陰陽があ

つて、私の様にコダワリを持たぬ性質の人間は、

又別に緻密な人を好むやうだ。

交際してゐるうちに疎縁になる人もあるし、

始めはそれ程に思はぬうち、だん／＼親しさが

増して来る者もある。

合縁奇縁とよく言ふが、私とおじいさんとは

全くそれだ。藝人同士で好き合ふなんて、なか

なかさうザラにあるもんぢやアない。

私と文五郎さんと懇意になる方が當然のやう

に、世間では思ふらしいが、もつとも事だ。

そして實際は文五郎さんの方が、おじいさんよ

りは古く知合つた。

「浪花女」を芝居にすることになり、寛チャ

ンの肝入りで、津太夫師匠と文五郎さんに、團

平、越路(大掾)のことを訊いたり、又、文五

郎さんにわざ／＼上京して貰つて指導されたこ

ともあつた。

だから、文五郎さんの方がおじいさんより古

い交際だ。

おじいさんに會つたのは、別に芝居にしよう

などといふ企劃もなしに、只、逢つてみたくな

つて大阪の知合の人に紹介を頼んだのである。

それから、私が咽喉を患らひ鰻谷の辰巳さん

へ炭屋町の「いとう」から通ふ道筋が丁度榮三

の家の前であるところから、丁度初秋の頃だつ

たと思ふ、格子にまだ麻のれんが掛けてあるそ
の暖簾の下に、榮三の膝が何時も見えてゐた。
一度會つた後だつたので、何気なく聲をかけ、
毎日往來してゐるうちにだん／＼私は淡々とし
た彼の氣質に魅入られたのである。

附合へばつきあふ程、味のある人だと思つた。

私には年少の頃からの癖で、年長の人でも、又
方面の違ふ先輩、又知合の人の話でこれは勉強
になると思ふと必ず「ノート」に書入れる習癖
がある。

だん／＼逢ふ瀬が重なるにつれ、隔ての垣は
自然にとれて來た。

物に慮がなく、實直で潔癖、そして正しく物
を判断する。そして獨斷力が強く記憶力に富
み、尊敬に價する人だと思つた。

私の様な缺點の多い者は學ばねばならぬ藝人
だと思ひ、それから文樂が好きになつた。

正直に言ふと、榮三を好きになつたのは、會
ふ日が増すにつれてである。

現在でもあれ程好きな爺さんは無い。

榮三に惚れてから文樂が無性に好きになつ
た。若し私が榮三に惚れなかつたら、これ程文
樂病患者にはならなかつたらうと思ふ。

その證據に、おじいさんが死んでから文樂を
覗く氣がしない。

勿論、古靱太夫の近頃の風格は慕つてゐる
し、又、文五郎さんの藝も感心して居る。

しかし、榮三が死んでからどうも怖くて文樂
を見られない。

古靴のあの品のある藝質にマッチする人形の遣手は、斷然おじいさんより無いと謂つてい、。

古靴の名品、道明寺。佐太村。寺子屋。良辨。長局。炬燵。堀川。新口。陣屋。油屋。等々等々。

數へたらきりの無い程、近頃観たもの記憶にある限り、全く名コンビであつたからである。

中でも逸品は、この二人所演の、道明寺と、二月堂。その印象は私の生涯を通じて忘れることが出来ぬ神品だと思ふ。

私は、文樂を観た夜は必ず、その演物の演出を榮三から訊くことにしてゐる。東京なら、せき旅館(一度轟鼓町の大野屋へ泊つた事があつた)私の家へも必ず四五日は泊つた。

大阪なら榮三の家。話に熱した二人は酔潰れて火鉢の向前に倒れることもあつたのである。榮三から訊書したノートも十冊程あつた筈だが、柳ばしの家が戦火に遭つた爲め焼いてしまひ、現在手許に三四冊しか残つてゐない。

それでも、どうやらおじいさんに訊いた話の頭の中に生きて居る。

榮三は、不思議と私の母と仲好しであつた。母は彼をおじいさんと言つて居るので、私共迄知らずくのうちに、おじいさんと稱ぶやうになつた。

私はおじいさんも好きであつたが、又妻君のお梅さんも、おじいさんに劣らぬ程好きだつた。

榮三の家へそれ程通つたのも、偏へにお梅さんが親身にして呉れたからである。

お梅さんは、榮三より四つ五つ上で、私の悴の喜草をトテも可愛がり、昭和十八年そろ／＼日本に敗色の見えだす頃から腎臓が悪くなつて永く寝付くやうになつた時、丁度、悴が中座で「雛鷺の母」を上演してゐたが、それを最後に應召すると云ふ噂を聞いて、その重態の體を杖にすがり(榮三に固く留められて居たのに)おじいさんに内密で中座へ来て呉れた事がある。私はいまでも、この親身の情に涙がこみ上げらるのだ。

私は、何時もおじいさんと二人でおばアさんの枕許で話込む。それを又となく欣んで聞いて居たものだつた。

おばアさんが阻込む前から、私と榮三と飲む時は必ず何時もおじいさんの手料理だが、それが實にうまかつたのである。

一つ、いまでも心残りには、藝談は多く聞いたが、何時もその方に心を奪はれる爲め、おじいさんとおばアさんの馴初めを聞かすにしまつた。誰も聞いて居ないそんなこと迄、私は聞こうとはして居たのだが、何時も話が藝の方へばかり傾いてしまつて、人間榮三を覗き洩したのが遺憾だ。

おじいさんは、おばアさんを三月十三日の大阪空襲の夜、乳母車に乗せ、堺筋の高島屋の地下室に逃がれ、其處が危くなつた爲め、更に谷町六丁目の鈴木病院に逃げ、三日そこで收容され

てゐるうち、その院長が榮三夫妻と知つて大事にして呉れたさうだ。

お梅さんの實家は、京都の柳馬場であるので、その實家から迎ひの者が來、弟子の光造がリヤカーに乗せて送つた。それを見送つて榮三は、大和小泉村の後援者のもとへ身を寄せたのである。

大阪全市焼土と化した燒原で、この老夫婦は、この世の別れをした譯だつた。間もなくお梅さんは病改まつて、實家で息を引取つた。

おじいさんも、程經て小泉村で枯木の折れる様に死んでしまつた。

酒の好きなほかは全く養生家で、決して不攝生なことをしなかつた人だつたが、憎むべき戦争の犠牲となつた譯である。戦争の残酷な影響は、不出の名人に満足な榮譽を與へなかつた。

私はいまでもあの私に對する温顔を、忘れることが出来ない。私はその華儀に僅かの違ひで間に合はなかつたので、祥月の日、文樂に近い三つ寺で、おじいさんとおばアさんの供養を手向け、さ、やかな法要をした。

おじいさんに訊いた話を一とまとめにし、近く「人形役者」といふ文樂手記を著さうとしてゐる。そして故人の靈に獻する考へで居るのだが、それにしても、近く天皇陛下が文樂を御覽になるといふ通信を新聞で見た。藝人一代の榮えあるこの日を、彼の爲めに考へて呉れなかつた不運を嘆ずるのみである。

幕間 別冊 文樂號

定價二十五圓

(附錄共)

昭和二十二年六月二十五日 印刷
昭和二十二年七月一日 發行

編輯發行人 關 逸 雄

京都市中京區丸太町通小川西入

印刷所 株式會社 石田大成社印刷所

京都市下京區四條河原町東入

發行所 株式會社 和敬書店

昭和二十一年十二月二十四日 第三種郵便物認可

昭和二十二年六月二十五日 印刷

昭和二十二年七月一日 (每月一回一日發行)